

学びへの導入科目としての「地域教育学入門」の取り組み

—2007年度における授業実践のまとめ—

渡部 昭男・山根 俊喜・田丸 敏高・奥野 隆一・一盛 真・小林 勝年・太田 美幸

Creation of “Introductory Lecture on Regional Education”
as a Guidance & an Orientation of Study

- A Report of the Practice in the School Year of 2007 -

WATANABE Akio, YAMANE Toshiki, TAMARU Toshitaka, OKUNO Ryuichi,
ICHIMORI Makoto, KOBAYASHI Katsutoshi, OOTA Miyuki

キーワード：鳥取大学 地域学 地域教育 学校教育 入門科目

Key-word: Tottori University, Regional Sciences, regional education, school education, introductory lecture

序 章 課題と目的

2004年度から学年進行でスタートした鳥取大学地域学部（入学定員190人）は、2007年度で一応の完成をみた。地域学部は「地域学」¹を探究する学部であり、4つある学科の中の一つである地域教育学科（入学定員50人）では「地域教育学（Study of Regional Education）」の創造²を目指している。そして、研究面において学科スタッフが共同して「地域教育学」を探究するとともに、教育面においてカリキュラムを整備し実践を創造する営みにも力を注いでいる。

ところで、地域教育学科における「地域学」関連カリキュラム³としては、1年前期で学部必修の「地域学入門」を履修した上で、1年後期には学科必修の「地域教育学入門」及び「学習社会論」が設けられている。そして、2年前期「生涯発達論」（学科必修）、2年後期「地域教育計画論」（学科必修）、3年前期「地域学総説」（学部必修）、3年後期「地域教育福祉論」「家族支援論」（学科必修）、2～4年「地域教育ゼミ＋卒業研究」などが配列されている。「地域教育学入門」は、並列する「学習社会論」及び2年生以降の「地域学」関連カリキュラムを束ねた「地域教育学」の入門的な役割を期待されており、学士号取得までに至る学習のガイダンスないしオリエンテーションの機能を担うことにもなる。

果たして、そのような形での実践が創られているのであろうか。本稿では、2007年度における「地域教育学入門」の講義の実際をまとめた上で、その成果と課題を考察する。

第1章 2007年度の講義シラバス

1. 2007年度までの経緯

学科スタッフの有志が共同で実施する形態は、開講当初の2004年度から継続している。2006

¹ 詳しくは、地域学部 HP (<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/>) の「学部案内」にある『「地域」と『地域学』』および地域学研究科 HP (<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/master/>) の「研究科の概要」にある「資料1 鳥取大学における『地域学』について」を参照のこと。

² 渡部昭男（2007）『「学校教育学」から『地域教育学』『地域教育福祉学』への道程』『中間報告② 地域の教育福祉諸機関の連携に関する総合的研究—新しい専門性の形成をめざして—』。

³ 同上書、p.18の図3。

年度から渡部をチーフとする新しい担当チームに代わったのを契機に、それまでのオムニバス形式を改めて、テキストを定めた上で半期15回の流れをより意識したリレー方式とした。また、受講生についても、互いに知り合い、気兼ねのない雰囲気の中で意見交換などを行い、ひいては能動的に講義に臨めるようにと、6名程度からなる班を編成するとともに、スタッフと意見交換できるよう感想カードを用意した。2007年度は基本的に06年度を踏襲しつつ、スタッフの補強・担当章の一部変更・感想カードの改良など、幾つかの微修正を施した。

2. 2007年度の講義シラバス

2007年度の講義シラバスに関して、主要項目を以下に示す。

○授業の目的

- ①人間が育ち・学び・生きる場としての地域社会を、教育諸科学の領域から考察する。
- ②地域社会における教育機能の役割と構造を理解し、そのネットワークの意義を考える。
- ③講義に基づき学生がより深くテーマを設定し、研究・調査の糸口をつかみ、まとめる。
- ④2年次以降、自分がどのような学習をしていけばよいのか、という見通しをもつ。

○担当者の意図

- ①地域教育学の全体を俯瞰し、地域における教育（発達と学習、教育と福祉）の役割と機能・構造について講義する。
- ②学生は講義で学ぶと共に、そこからさらにより専門的な書物を読み、自分の関心を深める。
- ③レポートづくりを初めての研究作品として位置づけ、重視する。

○テキスト・参考書

- ①テキスト：青木久子・磯部裕子・大豆生田啓友『新しい教育原理 教育学への視座（第2版） 教育へのまなざしの転換を求めて』萌文書林。
- ②参考書：早稲田大学『卒論・ゼミ論の書き方（第2版）』早稲田大学出版部。

○15回の計画案（分担者）テキスト①の目次に即したテーマなど。

- ①（渡部）授業計画の紹介とガイダンス／班づくり
- ②（渡部）序章・「教育」を学ぶということ－「教育」を受けてきたあなたが「教育者」になることの意味－
PART 1：「教育」の諸相～「教育」のイメージと誤解を解く試み
第1章 「教育」という物語
- ③（山根）第2章 「学校」という空間
- ④（田丸）第3章 「発達」という神話
- ⑤（渡部）PART 1の総合討論
- ⑥（渡部）PART 2：「教育」の再考～「教育」という営みを問い直す作業
第4章 「教育の対象」としての子ども
- ⑦（小林）第5章 子どもの問題と学校教育
- ⑧（奥野）第8章 家族が生み出す教育のドラマ
- ⑨（一盛）第7章 「教育」の担い手としての教師
- ⑩（渡部）第6章 学びを支える教育実践
- ⑪（渡部）PART 2の総合討論
- ⑫（太田）PART 3：「教育」の可能性～「教育に何ができるのか」という課題と挑戦
第9章 社会の変化と教育課題

- ⑬ (渡部) 第10章 教育を再生する視点を求めて
- ⑭ (渡部) PART3の総合討論
- ⑮ (渡部+α) 地域教育ゼミへのお誘い/レポート提出

第2章 講義の実際

1. 第1回(渡部) 授業計画の紹介とガイダンス/班づくり

○シラバス紹介

シラバスに基づいて、講義の目的、担当者の意図、テキスト・参考書、15回の計画案などを説明した。

○班づくり

誕生日順による班編成は1年生の前期の別科目で既に実施していたので、名(姓ではなく)の50音順で編成した。「あ行」の先頭者のみ1人をまず確定した上で、その後は相互にコミュニケーションさせながら、できるだけ短時間にゲーム感覚で全員が並び終えるよう求めた。並び終わると、前から順に6人ずつでグループを組ませた。楽しい雰囲気の下に班編成がおわると、班ごとに教室の自由な位置に着席させて、次に自己紹介タイムを設けた。盛り上がって、グループのニックネームや班長を定めた班もあった。

○レポートづくり

大学で作成するレポートは、自らの課題意識に基づいてテーマを設定し、文献などの資料に依拠しながら、自らの主張や見解を論理的・説得的に論じたものである。その意味で、「正答」を推測して答案を仕上げる大学入試等の小論文対策というイメージと決別する必要がある。講義の中で各自が課題意識を深めていくこと、知的生産活動を支援する図書館の様々な機能を知り活用すること、そして短くてもよいので実際にレポートを書き上げることを目指した。

そこで、附属図書館に備えてあるビデオ『新・図書館の達人⑥ レポート・論文の作成法』(紀伊国屋書店、2002、34分)を上映した。同ビデオを選んだのは、図書館活用によるレポート作成のイロハが簡潔に映像化されており、また資料「レポート・論文作成法-誰にでも書ける10のステップ」が1年生にも分かり易く、使用してこれまでも好評であったという理由からである。「10のステップ」とは、以下のようである。

「ステップ1 テーマの選択/ステップ2 事前調査/ステップ3 仮アウトライン作成/ステップ4 関連文献の調査/ステップ5 文献の入手/ステップ6 文献の読解と整理/ステップ7 最終アウトライン作成/ステップ8 執筆・校正/ステップ9 出典の表示/ステップ10 仕上げ」

○「個人カード」の活用

感想カードを改良して、07年度から「個人カード」を導入した。「個人カード」はB5判用紙1枚(表面)で、講義の月日、学籍番号、氏名、A:前時の復習事項、B:次時の予習事項、C:講義の感想や意見、D:来週までに復習・再確認したり発展的に調べてみたい事項、という欄が設けてある。受講生は講義前にA・B欄を必ず記入して持参し、講義終了後にC・D欄に書き込み、渡部研究室のカゴに毎回提出することとした。

提出された「個人カード」により、チーフの渡部は受講生の出席状況、予習・復習の様子、講義への感想や意見などを、15回全体を通じて把握することができた。必要な場合には次時に、質問へ回答したり、理解不足や誤解事項には説明を補うなどした。「個人カード」は講義担当者

には必ず読んでもらおうとともに、反響が大きかった回に関しては担当者全員にも回覧した。

.....

○受講生の感想（「個人カード」から特徴的な感想を幾つか記す）

・新しい班分けになって、改めて頑張ろうと思いました。後期の授業内容で幾つか気になるものがあつたので、楽しみです。総合討論では自分の意見をしっかりと言えるようにしたいです。ビデオを見て、レポート作成について詳しく分かつたので良かったです。レポートでは、ただ単に自分の意見を書くだけではなく、様々な文献などを引用して、自分の意見を裏付けたり、違った意見を書くことが必要だということが分かりました。テーマがまだはっきり決まつていないので、次週までに決めたいです。

・レポートの書き方の10のステップを見て、今までの自分のレポートの書き方の反省点がたくさん見つかった。この第1回目の授業で班分けをしたけど、今まであまりしゃべつたことのない人とかもいるから、この授業を通して意見交換をしたりして、仲良くなつていきたいと思う。自分の興味のあるテーマでレポート作成できるので、じっくり調べて取り組みたい。

2. 第2回（渡部）序章&PART1「教育」の諸相・第1章「教育」という物語

渡部の専門は特別支援教育であり、「障害児教育論」「障害児指導法」「地域教育福祉論」「地域教育ゼミ（特別支援教育）」などを担当しているが、教育学全般に幅広く関心を向けている。テキストを使用する初回であることから、前時に二つの課題（序章・1章の予習、著者の一人「大豆生田啓友」氏の読み方調べ）を出しておいた。

○導入一班活動

書籍の「奥付」には重要な情報が潜んでいることを、まず知らせた。テキストは1999年に初版が出され、2005年に改訂されていることが分かる。著者名や所属も書かれているが、残念ながら本書では名前にルビが振っていない。そこで早速、班で課題2（姓名の読み方）の結果を交流させた。「大豆生田啓友」でネット検索すると、「おおまめうだ・ひろとも」氏を紹介する関東学院大学HPの人間環境学部・教員紹介がヒットする。中には、「大豆生田」でネット検索して、「大豆生田」姓のいわれや「27とおひり」もの読み方があることを知つた者もいた。

続いて、渡部が前期に担当した別科目でのレポートのタイトル一覧を配布し、それを参考に現時点で取り組んでみたいレポート課題を出させた。

○テキスト選定の理由

さらに親しくなれたところで、テキストの解説に入った。渡部がこの書をテキストに選んだ理由は、教育にかかわる諸問題の多面的な取り扱い、約180頁・10章構成というほど良い分量、文献一覧・索引がきちんと備わっていること、比較的新しい年度の改訂本であること等である。さらに重要であつたのは、タイトル『新しい教育原理 教育学への視座』に象徴されているように、本書が既存の「教育（学）」を見直す作業にも力点を置いていたことである。「地域教育学」も、既存の「学校教育学」の再構成を目指すものであることから、著者たちと視座を共有できるのではないかと期待した。

「…みなさんが21世紀の教育をデザインするためのひとつの手がかりとなることを願っている。もちろん、この書がそもそも教育に関する『知』を提供するだけでなく、教育という営為を読み直すための視座を提供したい…。／21世紀の教育を切り拓くためには『教育』という営みそのものを問い、『教育』の現実を直視し、『教育』の方向性を見定めるといふ極めて困難を伴う作業が必要であらう。…」(p.1「第2版 はじめに」)

○序章の解説

加えて、この書の副タイトルにある「教育へのまなざしの転換を求めて」というアプローチを高く評価したい。序章の意図は、『教育』を受けてきたあなたが『教育者』になることの意味」として明示されている。「教育を受ける者」から「する者」になっていくことを、「まなざしの転換」として意図的に促す姿勢には大いに共感を覚える。

「体罰を受けた者はいつか体罰を返す、権力に迎合したものはいつか権力をふるうと言われる。これを再演技化というが、人類の歴史は、ほとんど、この再演技化の繰り返しである。…／教育を受けてきた者が教育をする者になるには、無意識に展開されるであろう再演技化の内容を意識にのぼらせ、自分でその是非を吟味する力が必要である。」(p. 14)

著者(青木)の「再演技化」という指摘に、受講生は大きな刺激を受けたようであった。

○PART 1 及び第 1 章の解説

PART 1 の著者たちのねらいは、以下のように記されている。

「これまでまったく疑うことなく、信じてきた『教育』のイメージ。そのイメージは、いつ、誰が、どのようにして作りあげたものなのだろうか。私たちの最初の作業は、私たちが抱きつづけている『教育』のイメージを突き崩し、その崩れた姿に光をあててみることである。私たちは、光のむこうに、新しい教育の姿を見ることができようか。それとも……。」(p. 16)

10月のひと月、3回にわたってPART 1を進めていく意図を伝え、3回が終わった時点では恐らく「教育(第1章)」「学校(第2章)」「発達(第3章)」へのイメージが変容しているであろうこと、そんな自分自身を発見できる楽しみが待っていることを予告した。

著者たちは、第1章で「現代社会の中では、学校を中心に教育を考える人が多いかもしれないが、ここでは教育という営みを、子育てという人間形成機能としてとらえなおしてみよう」と呼びかけている。具体的には、まず「教育が営まれる場」(pp. 18-23)において、「子どもの学校への囲い込み」を歴史的に明らかにしつつ、「学校の教育機能」の他に、「家庭の教育機能」や「地域および社会生活の場における教育機能」に気づかせようとしている。次に、「子育ての営みと教育」(pp. 23-26)では、民俗学的な知見も踏まえて日本のムラ社会に古くからあった「子宝思想」「子やらい」「通過儀礼」などを紹介している。その上で、「社会生活そのものが子どもを育てる機能を持っている」ことを踏まえて、広義の教育、すなわち「人間形成とその教育機能」(pp. 27-38)へと読者を導いていく。第1章におけるこの流れは受講生にも分かりやすかったようである。

「学校がまだなかった時代に『教育』は存在しなかったのだろうか？」と問いかけると、学校以外において教育の営みがあった(ありえる)ことを想起できたようである。特に、貴族や武士といった階級ではなく、学校とは永らく無縁であった農民について考えさせると容易であった。学校がなくても、ムラでの農業を中心とした生活や労働の営みの中で、人間(ヒト)として生れ落ちた赤子が大人の農民に育っていったのである。テキストの記述を重ねて、「学校教育(学)」から「地域教育(学)」へと飛翔する入り口にまずなっただけではなかろうか。

なお、第1章の最終部分に「教育の語源」として「産・育・訓・教」という言葉が説明されていることを示し、この用語は「地域教育学」を構想する上で極めて重要であること、詳しい説明は次時に山根が行うことを予告した。

.....

○受講生の感想

・今日は、まず班の人と話し合いをしました。また、班の人たちと仲良くなれた様な気がして

嬉しかったです。そして、やっぱり渡部先生は話が上手いなあと思いました。話を聞いていると「地域教育」って良いのかなと思いました。今日は、少し地域学部・地域教育学科で学んでいるということに自信が持てた様な気がします。

・「再演技化」「教育する家族」「子宝思想」など新しい言葉が、予習で読んだ時にはよく分からなかったが、講義を聞いて理解することができた。… [班発表を通じて-引用者による補足] 他のグループの意見を聞けるのもいいことだと思う。

・まず印象に残ったのが、誰しもがモデル=再演技化を持っているということである。…
・私の考えでは、教育は学校があくまで中心であって、地域や社会はまわりからサポートするような感じで営まれていると思っていました。しかし、教育という営みは子育てという人間形成機能としてとらえなおすことで、学校も家庭も地域も同等に教育という営みに参加するべきであると思いました。また、気になるワードがたくさんあったので、調べてみたいと思いました。

3. 第3回（山根）第2章「学校」という空間

山根の専門は教育方法学であり、「教育評価論」「カリキュラム論」「地域教育史」「地域教育ゼミ(教育学)」などを担当している。地域教育学科の誕生に際して、学科のコンセプトの土台、カリキュラムの大枠を提起したのは山根であり、「地域教育学」を語る上で欠かすことのできない存在である。

また、テキストの第2章『「学校」という空間』は、「学校の誕生」「学校論とその課題」「『学校空間』への挑戦」で構成されており、教育史・人間形成論も得意分野とする山根にふさわしい章である。

.....

テーマ：学校という空間（文責・山根俊喜）

教科書の参考文献としても挙げられている寺崎弘昭の所論などに依りながら、学校論として3つのサブテーマで講義した。

まず、前回の教育概念の追究を引き継ぐ形で、学校論Ⅰとして「教育 education と学校教育 schooling」の関係を論じた。教育は元来「産育」(educere と educare) を意味していたこと、近代学校の発達にともなって訓練や教授など学校的営みを意味するようになったことを示し、教育を理解する為には、産育までさかのぼって考えてみる必要があることを論じた。そして地域教育学科では、①人間の形成作用を「産・育・訓・教」といった広がりの中かで捉え、②時間軸としては学齢期だけではなく誕生から往生までの生涯学習、生涯発達を問題とし、③さらに、①②を地域の「形成」作用という土台のもとでトータルに把握することを目指していることを示した。また個々の授業科目がこの構想のどこに位置付くのかを説明した。

次に学校論Ⅱとして近代学校が歴史的にどのように誕生し発展したのかを論じた。古典近代の時代に生成した「教育」が、歴史的展開過程なかでどのようにその概念をつくりかえながら近代学校(国民教育制度)の中に流れ込んでいったのかを、普通教育の誕生(ルネサンス)、義務教育の誕生(宗教改革)とこれらの結合(コメニウス)、科学革命、市民革命、産業革命、国民国家の誕生といった、主要なインパクトとの関係で整理した。また誕生した近代学校の機能と、その機能を効率よく果たす為にカリキュラム・クラス・一斉教授・時間割等々が発明されたことを示した。加えて、20世紀初頭以降の現代に至る学校批判についてもその主要な論点を紹介した。

さらに、学校論Ⅲとして、近代学校空間の歴史的特異性を論じた。欧米における16世紀以降の学校(とくに教場)の様子を示す図版・写真、日本に関しては寺子屋の図版を見せながら、その変遷を追い、一教室一教師、生徒教師対面型、一斉教授方式などわれわれが学校をイメージするさい「あたりまえ」だと思われることが歴史的にある時点である目的をもって発明されたことを示した。フーコーに依れば、近代学校はパノプティコン原理(ジェレミー・ベンサム)によって作られた規律・訓練の装置と捉えられることを紹介した。

最後に、近代の<教育>も<学校>も歴史的に発明され、つくりかえられながら現代に至っているとすれば、これを現代の必要に応じてさらに作り変える(放棄することも含めて)ことは可能であること、「地域教育」という視点から教育や学校を捉え直すことはその試みの一環であることを論じた。

.....

○受講生の感想

・「教育」という言葉が「養うこと」を意味していたと聞いて、はじめはよく分からなかったけど、話を聞くうちにすごく当てはまっていると思うようになった。私の中で、すごい衝撃的なことになった。...

・地域教育学科のカリキュラムで必修科目などが図に表してあって、どの授業がどの分野なのかがよく分かって、おもしろかった。...

・今、私たちは当たり前のように学校に通い、授業を受けているが、それは一つの大きな発明であり、人間が作ったシステムであるということで、昔の例と今を比較することで、学校という空間の変化を知ることができ、面白かった。これがたったの数百年で当然なものとなっていることは驚くべきことである。...

・今回の講義を聞いて、学校という空間がどのように発展し、変化してきたのかということがよく分かりました。ペル・ランカスター以前の教室や寺子屋では、子供たちが走り回っていたり、話しをしていたりと無秩序であったのに、モニトリアル・システムを発明してから秩序のある学校になり、現在にも残っているということがすごいことだと思いました。...

4. 第4回(田丸)第3章「発達」という神話

田丸の専門は発達心理学であり、「生涯発達論」「発達心理学特論」「地域教育ゼミ(心理学)」などを担当している。地域教育学科には教師・保育士を志望する学生の他に、心理士を目指す者もいる。職業とまではいかななくても、心理学になんとか惹かれ、興味・関心を持つ者は少なくない。その意味で、受講生は心理学を専門とするスタッフとの出会いを楽しみにしている。

第3章は、「人間はなぜか『発達』という言葉を使って、身体のみならず精神的進歩が完全な域に達することに価値をおくのである。ここに教育が介在し、教育によって発達が完全な域に達することが目指されるのである。」(p.58)としつつ、「発達という神話を生み出した歴史を概観し、発達をとらえる視座を明らかにして、教育の根底をなす人間の見方、とらえ方を確かなものにしていくことにしよう」(p.55)と呼びかけている。

第3章を田丸はどのように料理して、受講生に「まなざしの転換」を迫ったのであろうか。

.....

テーマ：発達とは何か？(文責・田丸敏高)

テキストでは、一般に流布している(と思われる)「発達」という言葉について、完全性に向かう精神的進歩という価値意識を批判している。私は、子どもの研究をする立場から、発達と

いう方法論について、その意義を明らかにしたい。おそらく学生のみなさんが考えている発達とは多少異なっていると思うが、心理学は年齢による行動の変化を発達として測定しようとした。ビネーの年齢別知能尺度はちょうど100年前(1908年)に作成された。これによって、共通して子どもたちの行動が年齢によって増加し高次になっていくことが示された。また、知能年齢が標準的な発達よりかなり遅れている場合は、教育上の配慮が必要なこともわかった。発達は測定と結びついた概念であるということが第1の要点である。

その後、ゲゼルたちの研究により、発達は知能の側面だけではなく、適応行動・粗大運動行動・微細運動行動・言語行動・個人社会的行動など諸領域が、時期時期において並行的に変化することが明らかになった。教育学的に言えば、ある特定の領域だけが進歩するのではなく全体として調和的に進歩することが価値あるということになる。こうして、発達とは、大人にとって都合のよい何か特定の能力だけが伸びることを意味するのではなく、調和のとれた成長(これが子どもらしさであるの根拠であると思われるが)を意味するということが、第2の要点である。

第3に、発達は単調増加ではなく、生成・発展・消滅の過程を示す概念である。たとえば、乳児期の子どもは乳首を吸って飲むことができる。しかし、幼児以降の子どもも大人もこうした行動はできなくなる。その代わりコップから飲むという新しい行動が可能になる。つまり、以前の行動が消滅することによって新しい行動が出現可能になる。あるいは、単純な記憶力は児童期にはいと衰えてくる。それに代わって推理するような思考力が進歩する。こうした無数の事実が、発達における交替を示している。実は、これが発達段階という考え方を導き出したのである。発達段階を明らかにすることが、発達研究の当面する目標となった。ワロン(1941)がいうところでは、「これらさまざまな方法の成果によって、発達途上の心理生活が示す、ときには対立したさまざまな様相が区別されるようになった。それらの様相は段階をなしており、その段階が継起する順序はこの上もなく重要であって、…[段階の]継起によって、さまざまな種類の要因のあいだには一つの系統—しかもそれは多様な干渉のためにしばしば複雑である—があることが確証されるからである。」

ここで、子どもと台風とを類比的に捉え、心理現象の理解を促したい。台風の中心には台風の目がある。しかし、不思議なことに台風の目は雨風もなく静かで穏やかである。いくら目を凝らして台風の目を観察しても、どこにも台風の脅威の源は見つからない。子どもも同様に、子どもの心の中をのぞこうとしても何が何だかわからない。台風の本質を見極めるためにはいったん台風の目から離れて、「変化と関係」の中で台風を観察する必要があった。その結果、「発達する低気圧」という台風の本質を発見することができた。ここでいう発達とは、「発生→発展→消滅」の過程をたどるということの意味である。同様に、子どもも「発達する行動」を見てみると、子どもの不安定さや成長力などが理解できる。多くの原始反射—たとえば、ATNRは生後1ヶ月頃明確に示されるがその後消失する—は生誕後はっきり認められるがやがて大脳の抑制を受け、出現しなくなる。幼児期にあれほど夢中になるごっこあそびも、児童期後半にはほとんど見向きもされなくなる。夢中になって周りを巻き込んでいく様子は、台風と似ている。低気圧はヘクトパスカルという単位で測定される。発達する行動はというと、年齢(知能年齢/発達年齢)で測定されたり発達段階によって表されたりする。要するに、子ども研究を行う発達心理学は、直接子どもの心を明らかにしようという方法をあきらめて(実は19世紀の意識心理学はここに努力を傾けていた)、発達する行動を研究対象とすることにより子どもの心の本質を理解する道が開かれ、現在では年齢や発達段階によってさまざまな子どもの行動形態を比

較・区別・分類し、心理発達に関わる諸要因を段階ごとに示すことができるようになった。ある年齢では養育者の受容と働きかけが子どもの発達に大きな影響を与え、他の年齢では仲間関係や仲間相互作用が重要な要因として評価されるようになった。

.....

○受講生の感想

・今日の講義は人の意見を聞いたり、自分の意見を発言する場が多くあって、人がどのように考えているのか知ることができてすごくよかった。皆の意見の中でも“完全な形態”ってなんだろうってところにすごく疑問を感じた。...

・今日の授業で一番感じたことは、人間は不思議だということ。「発達」という言葉には、何か進歩するというイメージを持っていましたが、発生→発展→消滅という流れが発達だと聞いて、自分の考えもせまかったなと思いました。

・心理学は奥が深いと改めて感じさせられた。でも、田丸先生がおっしゃっていたように「台風の子どもの心」という考え方は非常に分かりやすかった。子どもといえば私もまだ子どもで、日々刻々と心理的变化を遂げている。そんな中で、今日の『子どもの精神的発達』[ワロン、1941]の資料の内容を理解できるまでになれたらなんて思った。そして、“生まれた直後、歩けないことに意味がある”の話にもすごく魅力を感じた。社会性・情動を発達させるために人間は赤ん坊の頃、たくさん世話をしてもらえる。すごく納得できる話だった。田丸ワールドのとりこになりそうです。

5. 第5回（渡部）PART 1の総合討論

テキストに重ねて「地域教育学」を入門的に語るという手法をとるからには、単にテキストの解説にとどまらずに、どこかで「地域教育学」とは何かを説明しておく必要がある。そこで、PART 1の総合討論を行うとともに、PART 1に関連させて「地域教育学」の枠組みを提示することにした。

○総合討論

二つの課題で班活動を行った。一つはレポート作成の進行状況の交流であり、もう一つはPART 1を終えての感想・意見の交換である。

○PART 1（3つの章）の繋ぎ方

班活動の後で、「第1章（渡部）—第2章（山根）—第3章（田丸）の繋がり」を渡部なりに解説して見せた。リレー方式の講義で重要なことは、担当者が異なる各回の流れをいかに作り出すかということである。オムニバス形式の場合は、受講生個々の作業に委ねられることが多い。これに対して、「地域教育学入門」では「繋ぎ」のために、二つのツールを用意した。一つ目は、既に述べたようにテキストをベースとしたことである。二つ目が、チーフ担当者である渡部なりの繋ぎ方を見せることである。もちろん、渡部の繋ぎ方が「正解＝正答」というわけではない。あくまでもそれを一つのたたき台として、各受講生なりの繋ぎを成し遂げてほしいがためである。

○総合科学「地域学」および総合学部「地域学部」の魅力

次に、渡部（2007）『学校教育学』から『地域教育学』『地域教育福祉学』への道程」を印刷・配布して、「教育学部→教育地域科学部→地域学部」という改組の経緯とその背景や意図、鳥取大学における総合科学としての「地域学」の枠組み、地域学部におけるカリキュラムの特徴と構造などを知らせた。地域教育学科に狭く閉じ籠るのではなく、総合学部（総合大学）である

特長を活かすためにも、他学科（他学部）のカリキュラムにも関心をもち、積極的に受講し、他学科のスタッフ・学生とも交流する魅力を述べた。

○「地域教育学」の構想

最後にまとめとして、「学校教育（学）」を包み込むイメージでの「地域教育（学）」の構想を提示した。それは、「個人カード」を見ると受講生に「学校教育（学）vs地域教育（学）」という対抗的な捉え方が強いという印象があったからである。第3回の時間において、山根は『「地域教育学」の構想』⁴を提示している。「地域教育学」の特徴は、横軸に示した「産・育・訓・教」という「人間の形成作用の広がり」（機能の広がり）と、縦軸に示した「誕生から往生まで」の一生涯にわたる「時間軸の広がり・ライフステージの繋がり」として描かれている。これを丁寧に読めば、「学校教育（学）」は、そのうちの「訓・教」の機能＋「学齢期（ないし、せいぜい幼稚園～高校の年齢）」のライフステージに焦点を当てたものであることが分かる。

山根の提起した「①機能の広がり、②ライフステージの繋がり」を踏まえつつ、渡部はさらに「③空間としての『地域』の重なり」（地域・空間の重層性、家庭一町内会一小学校の校区一中学校の校区一基礎自治体・市区町村一〔広域連合・事務組合〕広域自治体・都道府県一〔将来的には道州一〕中央政府・国一アジアー世界）および「④多様な人々のかかわり」（主体・アクターの関係性、子ども一保護者一家族・親族一学校教職員・学校長一教育長・教育委員会職員一教育委員長・教育委員一首長一議会議員一地域住民など・・・）を追加し、4次元で広がるイメージの構想を示した。理解を助ける例示として、「地域学入門」（学部必修・1年前期）においてゲストを招いて特別講義を受けた鳥取県南部町の「コミュニティ・スクールの取り組み」、およびマスコミ報道が連続した「いじめ自殺」事件における責任の問われ方（責任は誰にあるのか＝いじめた子どもか、その保護者か、校長・教職員か、教育長・教育委員長か、自治体の首長か、国の文部科学大臣か？）などを挙げた。

.....

○受講生の感想

・今日は今までの講義（第I部）の総復習ということで、ふり返ってみて、はじめ自分一人で教科書を読んだ時の印象と、班のみんなで意見を共有しあってから読むのとは、自分の中での考え方が少し変わったように思いました。...

・〔第2回の〕講義で「学校教育」対「地域教育」という構図が出てきて、「地域教育」は「学校教育」を完全に否定してしまうものなのだろうかと考えてしまったのですが、「学校教育」という概念も含み、さらに広い範囲で教育をとらえるという考えこそ、これまでと違う切り口でおもしろいなと思いました。...

・地域教育は、やはり学校教育に比べると、機能の広がり、ライフステージの繋がり、空間としての「地域」の重なり、人々のかかわりとかに対して〔おいて〕、とても広い視野の教育と思った。特に思ったことは、主体・アクターの違いである。学校教育の場合、先生と生徒せめて保護者ぐらいだが、地域教育になると先生と生徒はもちろん、その地域の人々など多くの人が関わっていく。...学校教育は今後もなくなっていくかと思う。でも、今現在の学校教育ではなくて、もっと地域に密着していく学校教育になると思う。学校教育と地域教育はお互いに対立するものではないということが分かった。...

・地域学部の趣旨を再確認でき、一つの見方にしばられるのではなく、文化・政策・環境など多

⁴ 渡部（2007）p.15の図2.

面的に地域について学べる学部だと分かった。教育の現場にも、例えば「[地域]文化」を盛り込んだ授業をするなど、子どもたちの視野も広げさせることができると思う。…

・学部の変化の話を聞いて、初めて知ったことが多く、とてもおもしろかったです。私もともと教員ではなく司書やカウンセラーを目指していたのですが、勉強していくうちに教員にもとても興味がわくようになりました。これからも、もっと勉強して、どの先生の研究室に入るかとかじっくり決めていきたいと思います。

.....

○第一「まとめレポート」の課題

序章及び第1～3章を踏まえて、第一回目の「まとめレポート」の課題を出した。

○第5回目の講義「地域教育学とは」を踏まえて、「地域教育学」「学校教育学」の特徴を表にまとめなさい。

○テキストの序章～第I部を終えて学んだことを記しなさい。特に、「まなざしの転換」「既成のイメージや誤解を解く試み」に関わって、テキスト学習の前と後、講義受講の前と後、における自らの変容に焦点をあてつつ述べなさい。

・A4版 40字×40行程度 横書き 2枚（両面印刷可能）

・提出 2007年11月13日（火）まで 「渡部研」のカゴへ

6. 第6回（渡部）PART2「教育」の再考・第4章「教育の対象」としての子ども

PART2『「教育」の再考』には『「教育」という営みを問い直す作業』という副題が付けられている。著者たちは、教育という舞台を「子ども」「学校生活」「学び」「教師」「家庭」の5幕に分けて、第4～8章の5回にわたり一幕一幕を再吟味しようというのである。

教職を目指す学生は学校教育や教職への「憧れ」をベースとしていることが多いが、PART2ではそうした素朴な思いをかなり激しく揺さぶることになる。そこで、展開の流れを「子ども」（渡部）—「学校生活」（小林）—「家庭」（奥野）—「教師」（一盛）—「学び」（渡部）と組み替えた。「学校生活」「家庭」「教師」では各担当者が厳しい現実を突きつけて大きく揺さぶることを企図しながら、その前後においては渡部が優しく、暖かくフォローするという趣向である。

○第4章の解説

第4章のタイトルは『「教育の対象」としての子ども』である。著者（磯部）は、古代（ギリシャ・スパルタ、平安貴族）及び中世・近世（スウォッドリングの習慣、間引き）のエピソードを紹介した上で、「固有な存在として子どもは近代の産物である」という見方に導いている。そして、「近代以降の教育の歴史は、『固有な存在』としての子どもの歴史と言い換えることも可能であろう」（p.79）としている。

次に、「教育の対象」であることは理解した上で、日本で一般的な「子ども像」、例えば「子どもは放っておくと遊んでしまう、向上しない。だから教えるのだ、学ばせるのだ。」といった「子ども」観・「学校」観と異なる視点はないのであろうか…、と受講生に投げかけてみた。

テキストにあるように「子ども」観は歴史的に変遷してきているが、それを映像で見せることはなかなか難しい。しかし、目を広く世界に向ければ、現代にも様々な「子ども」観があり、ユニークな教育が存在する。日本の子どもとは違う子どもの姿を実際に見せたい。歴史上の過

去の出来事ではなく、より身近で可能性のあるオルタナティブとして実感して欲しい。そこで、鳥取大学とも関係の深い「フレネ教育」を取り上げることにした（テキストでは第6章にフレネ教育は登場する）。

○フレネ教育にみる学校観・子ども観

フレネ教育の研究で著名な若狭蔵之助氏は実は御定年（1995年）までの約十年間、鳥取大学教育学部で教鞭をとっており、鳥取県内にもフレネ教育研究会のサークルがある。フレネ教育研究会のHP (<http://www011.upp.so-net.ne.jp/freinet/>) に掲載された情報および鳥取大学附属図書館に所蔵されているフレネ教育関係の図書リストを資料として印刷・配布し、若狭蔵之助監修のビデオ『シリーズ世界の教育⑤フランス編 フレネ学校の子どもたち—南フランスの小さな学校・大きな教育—』（テレビ静岡、1990、約60分）を上映した。

銀幕には、日本とは大きく異なる学校の実際、子どもの姿が映し出されたのである。

.....

○受講生の感想

・子どもは才能の宝箱かもしれないと思った。同じ年代の子でも、日本の子とフレネの子は全くといっていいほど異なったものだった。フレネ学校は、子どもの特性をフルに引き出している。「三つ子の魂百まで」ということわざがあるけど、このフレネ学校の子たちはまさに「11才の魂百まで」。・・・私も10年くらい前にもどれるなら、フレネ学校に転校してもっと自分の“可能性”を発見したいと思った。最初から最後まで衝撃の映像でした。

・フレネ学校という言葉は今日初めて聞きました。ビデオを見て驚くところがたくさんありました。一番驚いたのは、まず授業の形式です。一人一人が別のことをしていて、先生は皆を前にして板書したりすることが全くないということです。それぞれが課題を設定して、自分なりに勉強をすすめることで、自分が興味のあることをとことん調べられるのは、とてもうらやましいなあと思いました。日本は国語・数学・理科などそれぞれの教科に学習指導要領といって到達点が定められているので、ある程度皆が同じ知識を得ることができますが、フレネの場合、生徒間にすごく差が生まれてしまうのではないかと、という不安も生じました。でも、フレネの子は自分の意見をしっかり主張できる能力を持っているので勉強などには比べられないものを得ていると思いました。

・フレネ教育における最大の特徴は、子ども達の自ら学ぶという姿勢を最も大切にすることであり、子ども達が自ら疑問を持ったことについて自ら学び、その解決法を導き出すこと。また、そうした自分の成果について、他者の意見も踏まえつつ、自己評価するという所にあると考えられる。私は初め、それぞれ子ども達が違うことをしていることに驚いたが、日本の一斉教育や管理主義の下におかれた受験競争・学歴社会と比較すると、非常に子ども一人一人の個性を尊重する教育がなされているように感じた。・・・このような教育が自分の意志をしっかりと持ちつつ、他者のことも理解できる人間を形成するのではないかと思う。

7. 第7回（小林）第5章 子どもの問題と学校教育

小林の専門は教育臨床心理学・福祉心理学であり、「子ども理解と発達相談」「生徒指導の心理学」「地域教育ゼミ（心理学）」などを担当している。いじめ・不登校・障害児など、特別ニーズのある子の教育臨床の実践例に詳しく、学生にも熱く語りかける先生として定評がある。また、学内では学生への相談活動にも熱心である。

第5章「子どもの問題と学校教育」の趣旨は、「しばしば問題視される学校。学校に通い、学

校で学ぶことが当然のことであり、子どもたちにとってはむしろ幸せなことだと誰もが疑わずにきた『学校』が今、問い直されている。『学校』で今、何が起こり、何が変わってしまったのか。本章では、学校教育そのものの構造に迫りながら、子どもたちの生活の今を明らかにしていくことにする。」(p.85)と述べられている。

小林は、「不登校・いじめ」に焦点化して、教育を問い直す作業を迫っている。

．．．．．
テーマ：不登校の心理と地域教育（文責・小林勝年）

義務教育は子ども達の学習権を保障していくために学校設置の義務を行政に、就学義務を親に負わしてきたが、学校に行くことの義務を子ども達に課してはいない。にもかかわらず子ども達の多くは「学校には行かなければならない」と言う。そして親や教師は子ども達の学習権を保障するために自らに課せられた義務を「子ども達を学校に行かせる」という使役の意味にあっさり読み替えてしまった。そうした呪縛に取り憑かれた子どもの心理として5年間の不登校生活を体験した堂野博之「あかね色の空を見たよ」を分析した。

「学校に行かなければならない」という価値の絶対化が本人をどれだけ苦しめ、高垣忠一郎の指摘する「とらわれ」感情を惹起しているかーが読みとれた。また不登校体験は「学校に行かされている自分」から「学校へ行く自分」へ脱皮したり、「本当の自分」に出会うための彷徨を始め出す契機ともなり「ありのままの」自分にたどり着くプロセスであることも認められた。すなわち本当の自分に出会うと「本当の学び」が選り出され学びの意味と学びの方法の多様化が促される。それは地域においてe-ラーニングの普及やフリースクールの漸増をもたらした。すなわち既存の学校以外に学びの場が地域や社会において拡大・浸透されてきたわけだが、それこそが地域教育や社会教育・生涯教育のあり方に新たな波紋を投げかけることとなった。

しかしながら今日においても、不登校の子どもへの対応として学校復帰に向けた取り組みが優先され各々の子どもの様態に合わせた丁寧な対応が疎かにされる傾向が根強い。十把ひとからげの思考を捨てオルタナティブを社会で用意すること。学校絶対化の思考から解き放されていくこと。実はそれによって救われるのは学校適応が困難な子ども達だけではなく学校自身もまた救われるのである。何故なら、自らの教育活動を相対化することによって自己変革がもたらされ「進化していく学校」を成立させるからである。そしてそのうねりは結果として当該地域の「教育力」を底上げしていくことに結びついていくのであり地域教育の充実は学校教育へも大きな影響を及ぼしていると言えるであろう。

．．．．．
○受講生の感想

・今日のお話は不登校についてだったのだが、私が今まで思っていた以上に、不登校は深いものであった。「不登校」という言葉自体が意味を持っているものであり、学校嫌い、登校拒否という言葉から変わってできたものであるというところはなるほど、と思った。・・・

・学校の主人公はいつでも子どもであるということを忘れてはいけないなと思いました。不登校の子どもやいじめられる側の子ども、いじめられる側の子ども、それぞれの子どもが学校という一つのシステムによって、抑圧されたり、強制されることで、それぞれ追いつめられているということに気付くことができました。

・今日の講義内容は考えれば考えるほど謎を呼ぶものだった。いろんなことを吸収しすぎて何から言えばいいのか分からないけど、「学校の現状を知ることができた」気がする。といっても本当にごく狭い範囲の分野だろうけれど。不登校児のことから始まり、いじめ、学校のあり方。

改めて学校にはいろんな問題が存在していることを認識した。…だからこそ、今動き出さなければならない。どう動き出すのかを聞かれたら困るけれど、動き出せるために私は学んでいきたいと思う。今日の講義を聴いていたら、集中しすぎて頭が痛くなりました(笑)。またお話を伺いたいです。

・不登校の子どもはセンシティブだと感じた。…センシティブな子どもは、本質の泉みたいなもので、鏡みたいなもので、社会の欠陥をうつしている。／教育のシステムを変えて、圧力のない教育方法を考えたい。今日の講義のようなこと、学校が全てではないことが、常識になってほしい。私も小・中・高時代にこのことを知っていれば、楽になっただろう。

8. 第8回(奥野) 第8章 家族が生み出す教育のドラマ

奥野の専門は保育学であり、「保育原論」「保育の課程と方法」「児童福祉論」「地域教育ゼミ(保育)」など、主に保育士養成(1学年10人)にかかわる科目を担当している。地域教育学科に入学する学生の中には保育士資格を希望する者も多く、そうした学生と保育士コースの主任教授である奥野とが最初に出会う機会でもある。

第8章の趣旨をテキストでは、「学校教育の矛盾は、当然、家庭や社会の矛盾を反映する。…／第二次大戦後の日本の家族ドラマは、…中流の家庭像であり、目指すべき架空の家族風景となったのである。／しかし、家族風景が人間の本性や現実と遊離するにつれて、家庭の崩壊現象は始まる。…／第8章では、学校の周縁のドラマに目を転じて、教育を考えてみよう。みなさんがときにはうとましく思い、ときには依存して助けられている家族、社会、人間の関係の中に、広義の意味での教育作用を見いだすことだろう。」(p.133)と述べている。

それを加味した上で、奥野は以下のような講義を行った。

.....

テーマ：現代の家族の特徴と家庭の教育力(文責・奥野)

講義は二つの柱からなっている。一つは、学生の家庭の教育力を家族形態の多様化と親子関係の視点から考察した。講義で家族観をたずねると、ほとんどの学生は核家族か三世代家族をイメージしている。そこで今日、家族は同性婚・別居婚・里親など多様な形態をとっており、そのような家族形態の中で子どもは育っている事実を紹介した。特に、里親の事例から当然、血のつながらない条件での親子関係の形成の難しさとそれを乗り越えて親子関係を結ぶプロセスが親役割を習得とし、人間的な成長を果たしていること。子どもも親として受け入れていくプロセスが子どもの心の成長につながっていることを説明した。家族形態を越えて、親子関係の形成と再形成が親と子どもの人間的な成長を生み出していること。そこに家庭の教育力の根元があることを述べた。

二つは、家庭生活における子どもの位置と役割について調査資料を使いながら、問題を提起した。現代の家庭生活(生活共同体)の特徴を①少子化、②生活技術の発展、③学校化の視点から考察した。特徴は、①少子化と生活技術の発展により、家庭生活における子どもの役割がほとんどなくなり(炊事・洗濯・掃除など家事における役割)、②家庭が学校化(学校的価値の一元化)していること。その結果、子どもが生活共同体の一員であるという所属意識と存在感が稀薄となっている。子どもの人間的な成長にとって家庭生活の独自の役割が不透明になっている。

家庭・学校・地域という子どもが育つ3つの時空間における家庭の役割とは何かを考えることが家庭の教育力を問うことになる。

.....

○受講生の感想

・私は3世代家族が家族の基本形態かと思ってたんですが、マードックは核家族が家族の基本形態としていることが分かりました。また、確かに家庭は学校化・教育化してきていると思いました。...

・今日の授業で、子ども達は一日の生活の中で、家庭の仕事(炊事・掃除・洗濯)をする時間がほとんどないということが分かった。子ども達は家に帰ってまでも勉強することが役割とされている。家でも学校でも自分の役割が勉強だけになってしまったら、子ども達は病んでしまうのではないかと感じた。...

・今回の授業を聞き、家族とはどのようなものなのか、そしてどうあることが良いのかということを考えさせられた。私は今、ボランティアサークルで、養護施設の子どもたちに勉強を教えているのだが、その子どもたちは何かしらの理由で家族から離れて施設で生活している。詳しいことは知らないのだが、その子どもたちの中にもDVにあっていたり、配偶者の暴力を見ていたり、という子どもがいるかもしれない。そういった子どもの精神的ケアはとても難しい。...今後は、子どもの精神的ケアについても詳しく学んでみたい。

・家族形態や家族機能、子どもの変化についてテキストよりさらに深い内容の講義だったのですごく興味深かったし、いろいろと考えさせられた。特にDVに関しての問題は、子どもには関係ないと思っていたが、そうではなかった。DVの現場を見てしまった子どもの影響について、新たに考えてみる必要があると思った。また、年々増加している虐待においても、その子どものケアや虐待している親へのケアの重要性を感じた。

9. 第9回(一盛)第7章「教育」の担い手としての教師

第7章の趣旨をテキストでは、「...私たちは、これまでに実に多くの、そして実に多様な場面で『先生』に出会っていることに気づく。私たちが、日常的に『先生』あるいは『教師』とよぶ存在はいったい何であり、どうかかわりの中で、私たちは彼ら・彼女らを『先生』ととらえているのであろうか。.../本章では、こうした極めて素朴な疑問から出発して、『教師』という存在とその役割の意味を明らかにしていく。...」(p.119)と述べている。

担当する一盛の専門は教育史・人権教育であり、「地域教育史」「人権教育の研究」「特別活動の研究」「地域教育ゼミ(教育学)」などを担当しているが、問題関心は幅広い。講義を通して学生に揺さぶりをかけることが得意なスタッフであるので、TVドラマなどを通して形成された「理想の教師像」を意図的に崩すような講義をお願いした。

.....

テーマ:「教育」の担い手としての教師(文責・一盛)

本講義に課せられた課題は、素朴に「良い」教師を目指す学生に対し、生徒の目線からはなかなか見え難い「教師の労働」の実態を紹介することにより、彼ら・彼女らの教師像を「揺さぶる」ことにあった。具体的には、久富善之・佐藤学らの先行研究に依拠して、教師の困難性はその専門性に起因しているという視点から問題を立てた。

講義の構成は以下のようにした。

はじめに:教師に関する俗論

I:教師の疲弊 1. 教師の超過勤務と「過労死」ライン/2. 教師のバーンアウト(燃え尽き症候群)/3. 教師のメンタルヘルス

II:「文化としての多忙」 1. 教師の仕事内容の多様性/2. 教師のアイデンティティ/3. 生徒理解に対する過剰な要求/4. 教育の仕事の不確定的性質/5. 「教育」の範囲の肥大化/6. 悪循環の構造

III: 教師として生きる難しさの構造

IV: 改革への指標

V: 近年の学校・教師をめぐる政策の変化 1. 能力・業績給の導入/2. 教員評価/3. 「不適格教員」と教員の指導力不足/4. 教員管理の強化と「教えない」教員の増加

講義では、まずデータを学生に読ませる形で、教師の疲弊状況を確認していった。例えば、①教師の平均労働時間が厚労省のいわゆる「過労死ライン」を超えている事実、②毎年の離職者の中に占める死亡者と定年退職者の割合、③大阪の教師の「バーンアウト度」の状況、④分限処分における精神疾患患者の圧倒的な比率等。

次に、このような教師の疲弊は、教師という職業の専門性から生み出されている問題としてその構造の整理を試みた。そのうえで、この構造をどのように断ち切るのかという問題設定をし、①学級規模、②教員の年齢構成、③「同僚性」の構築、④親・地域との関係性に切り口があるのではないかと提起した。

ここで終わっては課題を達成できないので、最後の「落ち」は石原都政に求めた。すなわち、現在の学校・教師をめぐる教育改革の動向が先の改革へ指標とは異なる方向性に進めつつある厳しい状況を、主に東京都の教育改革を中心に具体的な行政資料を見ながら説明していった。

以上、本講義ではできるだけ学生の「おめでたい？」教師像をぶち壊すことに専念することとした。この後一連の講義の中で「教育」の可能性を語っていただくことを前提に遠慮なく話をした。職員室の人間関係、教師の家庭、親からのクレーム、各県の組合の実態なども話すべきであったかもしれないが、そのことはまたの次年度の課題としたい。

.....

○受講生の感想

・教師は熱意が必要だとか、ニュースやドラマを見て思い描いていた教師像をバツサリ切られたので、衝撃的だった。同僚性の構築というのは大事なことだと思うのに、副校長や主幹などを取り入れる制度が出来て、縦のつながりを強くするような構造になっているのは何故だろうと思った。...

・一盛先生の講義では、教師という仕事のつらさなどを全面的に話されたけど、おもしろかったです。職業柄、精神疾患に誰がなってもおかしくないのが今の社会であることを聞き、本当にすさまじい実態だと思いました。また、講義で気になったのは、あらゆることが「指導」として機能しているということです。給食・掃除・用便・趣味までにも指導が「拡大」するのは、どうなのだろうかと思いました。「教師」という仕事は「夢と希望」だけではやっていけないだな、とこの講義を聞き、改めて実感しました。

・一盛先生は「ぶち壊しに来た」と言われましたが、私はあまり壊れませんでした。ただ、教育のあいまいな範囲についてですが、教育には食育などは必要ないということですか？子どもの一生について考えることができる“地域教育”なので、人として一番大切な健康を考えることは必要なのではないでしょうか。

・今日の講義はこれまでと違って、教師という職業のウラを知ることができた。現在、教師という職業にはいろいろな問題があり、教師という職業の厳しさとか理不尽さを知った。その上で、学校・教師をめぐる政策が変化していたり、家庭の指導力の低下から学校に教育を全て任

せるようになったことから、さらに教師は追いつめられているように感じた。／今後、自分が教師を目指す上で、このことをきちんと頭において、自分は本当に教師になれるのか、考えていきたいと思う。

10. 第10回（渡部）第6章 学びを支える教育実践

第7～9回の連続3回にわたって、受講生はかなり大きく揺さぶられ、教職への「憧れ」が揺らぎ、固定観念を壊すことにもなった。そこで、今時においてはその傷を癒す意味で、学びを支える教育実践＝授業の面白さを伝えたい。

○ビデオ『漢字の語源をさぐる』の視聴と班活動

阿辻哲次・他によるビデオ『漢字の字源をさぐる（シリーズ授業①国語）』（岩波書店、1991、約45分）を視聴した。その際に、まんぜんと見るのではなく、授業研究会に参加している緊張感を持って、記録をしつつ参観してほしいことを伝えた。具体的には、①学習主体としての子どもたち（子どもの意外な発言や行動など）、②教授主体としての教師（教師の発問や教育方法など）、③両者を媒介する教材及び教育内容（漢字＝教材やその字源＝教育内容など）に着目すると良いことを事前に知らせた。視聴後に、短時間であるが感想を班で出し合った。

○第6章の解説

第6章で取り扱われている中でも、斉藤喜博の授業実践（pp.113-115）に焦点を定めて解説した。詳しく取り上げた実践は、3年生の国語教材「山の子ども」における「出口」の解釈、および4年生の国語教材「から」における「すぼっと」の解釈をめぐる授業の場面である。

また、参考資料として吉田章宏（1978）『授業の研究と心理学』国土社のうちの『発問の機能』の発生的研究を」の箇所を印刷・配布し、日本の学校現場において優れた授業づくりとそのための授業研究が営々と積み上げられてきたことを伝えた。フレネ教育とはまた違った意味で、授業づくりの魅力・教職の醍醐味を味わってほしい。

.....

○受講生の感想

・私はビデオをみるというよりは、自分もその中の授業に引き込まれる感じでした。自分の知らないことについて考えてみて、先生がその答えを言った時の「へー」という満足感がいっばいな授業でした。「子どもを次々と新鮮にし変革させていく」ものがこんなに大切なんだと分かりました。...

・まず初めに思ったのは、机の並べ方〔教卓を囲んでコの字型〕が変わっているなということだった。全員が前を向いているよりも一体感があって、子どもが話しやすそうに感じた。一学期から学んできたことがこの授業につながって、漢字についてゆっくりと深く考えられていいなと思った。漢字の意味をすぐに教えてしまうのではなくて、まず子どもたちに考えさせているところがすごい。子どもは自分たちでなんとか意味を考え出そうとしていて、自信がある者もいれば、ない者もいておもしろかった。／教師は「子どもが好き」と「授業が上手」という二つのものがないとダメだとおっしゃっていたが、...分かった気がした。斉藤喜博の出口の話はとてもおもしろかった。私も子どもたちと同じように、初めは斉藤の言う出口が分からなかったが、後で分かった。...

・ビデオを見て、まず子どもって面白いと思いました。そんな発想の仕方があるのかと感じさせられました。大人になってからだと生まれてこない考え方を子ども達はたくさん持っていて、その子どもたちを大切にしなければならぬと思った。次に先生の授業の進め方が面白かった

です。私はやっぱり間違えるのが嫌だからなかなか発言できなかつた記憶があるのですが、ビデオに出てきたクラスではそんなことおかまいなしで子ども達は自分の意見をクラスの皆にぶつけていました。そうすることで授業が何倍もふくらんで実りのあるものになっていると感じました。そういうふうな気持ちを持たせる先生の発問の仕方を学びたいと思いました。それぞれの教室に文化が存在していて、その文化をどのように作り上げるかによって、子ども達の可能性はいくらでも広がっていくのだと思いました。

11. 第11回（渡部）PART2の総合討論

PART2の流れに関しては既に前時にフォローしたので、今時は次のPART3「『教育』の可能性」に繋ぐことを意識した。すなわち、これまでの教育の視点にさらに福祉の視点を加味して、「地域教育+地域福祉=地域教育福祉」という発展方向を提示した。学科必修の「地域教育福祉論」（担当・渡部）が3年後期に位置づけられており、進路を幅広く考える上でも、また最終的に教職に就くとしても、1年生から「地域福祉」の観点を持ってほしいと思う。

○「地域でくらす会」の取り組み

そこで、鳥取県米子市で実際に地域福祉づくりを進めている「地域（まち）でくらす会」の井上徹理事長に無理をお願いし、手弁当で急遽お越しいただいた。嬉しいことに、井上さんとともに地域福祉情報誌『どげな』の編集に携わっているMさん（鳥取大学教育学部卒業生・同大学院教育学研究科修了生）も参加してくれた。「地域でくらす会」の詳細はHP（<http://www.machikura.com/>）に譲る。

.....

○受講生の感想

・ノーマライゼーション=地域（まち）でくらす。井上さんが考えた和訳はとてもよいと思いました。障害のある人もない人も同じように生きていくためには地域が必要不可欠だと思います。...

・施設を出るといことは危険を伴うが自由があつて、障害者は施設を出たいと思つていて、それを支えることはとても必要で大切なことだと思つた。私は米子出身だけど、米子でこんなにたくさんの取り組みが行われているということを初めて知つて、もっと自分が住む地域について知つていかないといけないと思つた。

・今日井上さんのお話を聞いて、真新しい世界に飛び込んでみたような感じでした。私の中で今まで「新しい職業を創る」という考えがなかつたからです。講義後の今でも「小学校の教員になりたい」という思いは変わっていませんが、でも井上さんのお話はとても新鮮でした。本当に“地域格差”というのは深刻な問題だと思います。「これがない。でも必要だ。でも誰も創ってくれない。自分で創るしかない。」ここまで考えつくのは簡単なことかもしれませんが、それを実行に移してしまった井上さんは本当にすごいと思つました。...

・地域福祉という領域には課題が多くあり、現時点においても解決不能と思われる問題が混在しているにもかかわらず、もともと就いていた職をやめ、地域福祉という新しい分野に挑んだ井上さんは行動力と積極性があつて凄いなあと感じた。協力者を募る際にも、自ら保健士をはじめとする必要な人材を確保するためにどンドン声をかける姿勢も素晴らしいと感じた。私達が所属する地域学部でも新たなキーパーソンを育てるということを目標の一つに掲げているが、井上さんはまさにその一人だと思う。

・地域教育は教育のことしか勉強しないとつていたけれど、福祉についても教育とかかわり

があることを知った。今ではさまざまな福祉サービスがあるけれども、まだまだ足りないと思う。地域の中から課題を発見して、仕事にすることもいいなあと思いました。

12. 第12回(太田) PART3「教育」の可能性・第9章 社会の変化と教育課題

いよいよ最終パートである。PART3『教育』の可能性には『教育に何ができるのか』という課題と挑戦』との副題がつけられている。著者たちは、第9章「社会の変化と教育課題」及び第10章「教育を再生する視点を求めて」を通して、どのような展望を切り拓こうとしているのであろうか。

太田の専門は成人教育・生涯学習であり、「地域教育計画論」などを担当している。新進気鋭の若手スタッフであり、受講生に比較的近い世代、及び担当チームでは唯一の女性スタッフであるという立場を活かして、第9章にからめつつ縦横に語ってもらうこととした。

.....

テーマ：社会の変化と教育課題 (文責・太田)

近代社会の産物である近代教育が「ポスト近代社会」に見られる諸現象に対していかなる課題を背負っているのかを整理しながら、子どもの育ち方の現代的構造を把握するための視座をいくつか紹介した。産業構造の変化にともなって生じた労働の変化、情報化、国際化、環境問題の顕在化、消費社会化、あるいは性の開放といった諸変容はつねに多様な「教育課題」を生じさせ、1960年半ばにはそれは生涯教育論という形をとってあらわれた。ギデンズの言う「再帰的近代化」が徹底されつつある今日においては、諸個人をして自らを問い返せしめる社会的圧力が一層強まり、それが子どもの発達環境にも大きな変化をもたらしている。

とりわけ日本社会においては、子どもの育ち方は中西新太郎が言うところの「振り子型成長構造」から「トライアングル型成長構造」へと変化し、1990年代後半以降、消費文化の世界が子どもの成長にとって基礎的な環境の一つとして定着しているといつてよい。子どもたちは消費社会のなかで大人の干渉を逃れた独自の文化圏を形成し、その世界と学校や家庭との間を行き来しながら育つ。大人が立ち入ることのできないその世界は数々の「教育問題」の根源であるとみなされることもあるが、子どもが生きる消費文化世界を形づくったのが子どもを消費者と見る産業界のまなざしであることは言うまでもない。「ひとつの近代化が別の近代化をむしばみ、変化させていくような新たな段階」(ギデンズ)である再帰的近代化の時代においては、「教育課題」を論じる際に政治・経済・文化を見渡す視点は不可欠である。

近代教育の前提となった近代社会の諸要素はこの数十年で大きく変化し、地域社会はもとより学校の変化(「学校の機能不全」)家庭の変化(標準的家族モデルの解体)も顕在化しつつある。そのなかで、ノスタルジアに浸るのではなく、子どもの現実をいかに把握しそれに即した教育をいかにしてつくっていくのか。この講義では、子どもの生活世界に関わる諸データや消費文化の事例を検討することで、新たな「地域教育」の創造に向けたリアリティ構築の契機を提供することを企図した。

.....

○受講生の感想

- ・ポケベルなどのパーソナル通信がどのように普及しているかが初めて分かりました。ファストフードとかファミレスなどの歴史も初めて知りました。「消費文化」と子どもとの関係を聞いていて、おもしろかったです。現実を把握することが大切なのだと分かりました。
- ・現代の子どもは消費社会・消費文化の中で自然と生きているし、大人によって消費の絶好の

ターゲットになっているのだなと分かりました。また、世代間での考え方は社会がどんどん変化しているのだから違うのが当然であり、どちらの意見、考え方がよいのかを考えるのではなく、世代間ギャップを認識して、どうしたらお互いがこれから理解して生活していくことが大事なのだということが分かりました。今の時代はいろいろな変化に対応していかななくてはならず、社会が学校教育に求めるものも変わってきているので、幅広い視野で物事を見ていかななくてはならないと思いました。

・固定された一つの物が大量に消費されていた時代から自分の好みに合わせて多種の中から選ぶようになってきているのだと思いました。また、子どもの育ち方も振り子型成長構造〔学校・家庭・地域〕から消費文化の介入によってトライアングル型成長構造〔学校・家庭・地域・消費文化の世界〕に変わってきたことが分かりました。…

・消費文化が子どもの根本に関わっているのは、今読んでいる内田樹氏の『下流志向』にも書いてあり、考えてみようと思った。金子由美子『自立クライシス』も読みたい。ジェンダーのことも興味がある。

.....

○第二「まとめレポート」の課題

第4～9章を踏まえて、第二回目の「まとめレポート」の課題を出した。

○テキスト第二部は「『教育』の再考～『教育』という営みを問い直す作業」がテーマでした。太田先生（第9章）までの講義をふまえつつ、二回目の「まとめレポート」を仕上げましょう。

○締切：2008年1月16日（水）「渡部研のカゴ」へ

○体裁：A4判 40字×30行 2枚（両面印刷可能）

・レポートの前半では、11～12月に受けた講義およびテキストの第4～9章に関して、皆さんが「『教育』という営みを問い直す作業」を進める上でどのように多面的・多角的な見直しに繋がったかをまとめましょう。

・レポートの後半では、井上さんの特別講義を含めて7回の中から、各自の最も関心をもったテーマを一つ選んで、そのテーマについてどのような「問い直し」が行われたかを具体的に記述してください。特に第一部との繋がりとして「教育する者」「地域を創る者」への転換ということを意識し、そのテーマについて何がどのように転換されつつあるかを述べて下さい。

最も関心を持ったテーマのみ記すと、提出総数50人のうち、「子ども」（第4章）が14人（28%）、「学校教育」（第5章）が11人（22%）、「教師」（第7章）が7人（14%）、「家庭」（第8章）と特別講義がともに6人（12%）ずつ、「社会変化」（第9章）が5人（10%）、「学び」（第6章、授業づくり）が1人（2%）という内訳であった。

13. 第13回（渡部）第10章 教育を再生する視点を求めて

第10章「教育を再生する視点を求めて」は、テキストの最終章である。著者（青木）は「新たに試みられている教育の試みのいくつかを提供し、これからの教育を再生する視点をみなさんとともに考えたい」として、「学びの共同体」「開かれた学校」「複雑性のパラダイム」「価値の多義性」などの新しい考えや試みを示している。

ただし、「教育を再生する視点」の獲得を急がせるべきではないだろう。たかが半期の講義を終えた程度で、「見つけました」と言ってくる1年生がいたとしたら、それは怪しい。むしろ大学4年間で、いや生涯をかけて、じっくりと「解」を見つけてほしい。とすれば、重要なこ

とは自ら課題を設定してとことん探究する姿勢ではなかろうか。

そこで、今時と次時の2回を合わせて、最終の「レポートづくり」を支援する講義とした。

○「学校と地域の関係」を問う事例としての「学校選択制」

受講生は全員、1年前期の学部必修「地域学入門」で鳥取県南部町における「コミュニティ・スクール」について、特別講師から映像をまじえて実際の取り組みについて聴く機会を持っている。一方で、マスコミでは「学校選択制」がひんぱんに取り上げられている。双方の改革・試みは、従来の通学区域制・学区制をどのように評価するかということに繋がり、引いては「学校と地域の関係」を問う好材料でもある。そこで、今回は探究すべきテーマ探しの一事例として「学校選択制」に定めた。

○ビデオの視聴

まず、改革の実像を目に焼き付けて何かを感じてほしいと思い、2007年3月21日に放映されたNHKスペシャル「“学校”って何ですか？」(90分)の中の東京都における「学校選択制」の部分を見せた。校区が隣り合う2つの中学校について、学校選択制の導入による長短双方の影響が紹介されており、保護者・生徒・教師にも取材を行った上での報道である。人気のA校には希望者が殺到して抽選入学となり、一方でB校は校舎の一部を閉鎖するほどに生徒数が減ったという映像であった。

視聴後に、班で意見交換を行った。

○諸解説の読み込み

次に、学校選択制にかかわる基本事項を押さえる必要がある。大部の図書を読むにはレポート提出までの時間が限られており、事典・辞典を活用することを知らせた。具体的には以下の3種の解説を参考までに準備した。加えて、参考文献一覧を作成する際には、著者名(発行年)「論文名」編者名『図書名』出版社、掲載頁というように記載し、著者名の50音順に並べることを教えた。

- ・荒井文昭(2006)「学校選択」教育科学研究会編『現代教育のキーワード』大月書店, pp. 228-229。
- ・葉養正明(2005)「学校選択・通学区域の弾力化」江川玫成・他編『最新 教育キーワード 137 第11版』時事通信社, pp. 82-83。
- ・室井修(2001)「学区制と学校選択」土屋基規・他編『最新 学校教育キーワード事典』旬報社, pp. 31-33。

まず①事実の記載と②解説者の評価や見解に区分して読み込んだ上で、③レポート執筆者の考え方を次第に固めていくと良いことを助言した。そして、次時まで3人の解説を読み込んでくるように指示した。

.....

○受講生の感想

・学校選択制はいいと思います。学校が地域で決まってしまうと、学校側には必ず生徒がくるという安心感が出てしまい、工夫だったり努力をしなくなってしまうのではないかと思う。親が選ぶのではなく、子ども自身が選ぶことが重要だと感じた。

・私は学校選択に賛成だ。公立校の品質保証が言われているが、それに学校は対応できていないように思う。この状態を改善するため、競争原理を教育現場にも導入し、公立学校全体のレベルをよみがえらせるべきだ。また、地域と保護者のつながりが損なわれるという意見もあるが、私は自らが希望した学校へ行くほうが「自分の学校だ」という意識が生まれ、強制的に指定学校に行くよりも学校との絆は深まると思う。

・レポートを書くためには課題意識を持つということが分かった。…学校選択制のビデオを見て、選択制の明と暗が浮きぼりになったと思った。公立離れがおこっている中では、選択制は有効な策だと思う。一方で、人気のある学校と人気のない学校がでてしまう。学校の評価などはどこまで確かなものかということに疑問に思った。このままの選択制でよいのかと思った。

・学校選択制についてのビデオを見て、私は改めてコミュニティ・スクール、地域の学校の重要性を感じた。…

・私は元々、学校選択制には反対です。今回もビデオにも出てきたように一体どのようにして学校を評価するのかという疑問を持っていましたし、学校教育現場に競争原理を持ち込むことにも強い反発を持っていました。そんな中、今回の講義では、この学校選択制をめぐる新たな視点に出会いました。それは、学校選択制は学校と地域とのつながりを断ち切るものだという事です。なぜ、地域という視点にこれまで気づかなかったのだろうと思いました。…

14. 第14回（渡部）PART3の総合討論

テキストを用いて、「おわりに—『教育』の愉しみ—」（pp.174-175）を解説した。特に、「ある一面だけでものをいう怖さ」「関連づけてとらえることの重要性」「問題はもっと複雑な絡み合いの中であって、その絡み合った糸をていねいに解きほぐしていかなければ何も解決の糸口は見えてこない」「教育に対する問題意識をきちんと踏まえたみなさん一人一人の実践がきっと教育を変えていく一歩になるであろう」「教育の世界は奥が深く、魅力的なのである」という著者たちのメッセージを意図して伝えた。

○レポートづくりの再確認

「個人カード」の記述から、レポートづくりに挑戦するぞという意気込みはあるが、具体的な作業の積み上げが伴っていない受講生が少なからず認められた。また、進行している者においても、注記や参考文献の書き方、「10のステップ」の後半＝「⑦最終アウトライン作成→⑧執筆・校正→⑨出展の表示→⑩仕上げ」がうろ覚えであることが分かった。

そこで、再度「10のステップ」を印刷・配布するとともに、よりコンパクトに基本事項がまとめられている旧版ビデオ『図書館の達人6 レポート・論文のまとめ方』（紀伊国屋書店、1993、28分）の方を視聴した。

○「学校選択制」をどう読み解くか

「学校選択制」を「地域教育学」の構想図から読み解いてみようと呼びかけた。

山根の提起した「①機能の広がり」「②ライフステージの繋がり」及び渡部が追加した「③空間としての『地域』の重なり」「④多様な人々のかかわり」から読み解いてみよう。

学校教育には、個々人の能力開発といった機能ばかりでなく「地域の共同性の継承・発展」という機能も期待される。また、年齢や性、能力や進路、障害のある・なし、家庭事情や社会階層、人生観や価値観などがそれぞれに異なる多様な人々の存在を前提にした「共同体づくり」をどう推し進めていくのか。一方で、気に入った商品やサービスを自由に購入したいという消費者ニーズも高まっている。居住地域を遥かに越えたネット上空間や情報世界も存在する。

また学校階梯別にみると、就学前の幼稚園・保育所段階は私立・民間も多く、また保護者の就労にも便を図って、送迎バスや自家用車で利用できる範囲から自由に選んでいる。高校段階では、公立校も都道府県立となり、選択制が一般的となっている。高等教育段階は、もちろん自由選択制である。なんらかの意味で「学校と地域の関係」を意図的に築けるのは、学校階梯や運営主体からみて、義務教育段階の公立校にしか残っていないのではないかとはいえ、校

区を定めて通学指定を行うだけで、「共同体づくり」が進む時代ではない。いかにすべきか…。

結論を急ぐ前に、日本において校区制はそもそもどのような原理に基づいて制定されたのか、そのシステム（学齢簿の作成、就学通知・学校指定、指定校の変更、区域外就学など）は具体的にはどのようなものであるのか、それがどのような問題や課題を持つと認識されるようになったのか…、まずはそうした基本事項を確認しておく必要があるようだ。その上で、校区制が孕む制度疲労への処方箋として、学校選択制もコミュニティ・スクールも位置づけることにはならないか。いずれが効果を上げているのか。それだけなのか、他に処方はないのか…。

「学校選択制」を例にとった場合でも、事態はこのように複雑に絡み合っている。絡んだ糸を解きほぐしながら、探求を続けてほしいものである。

.....

○受講生の感想

・教育とは何かを問い続ける姿勢や、自分に何ができるのかと探究する姿勢はとても大事だと思った。…

・この講義では毎回違う講師の方でいろいろなお話を聴くことができ良かった。テキストの最後の部分を読んで、先生がお話されたのを聴いて、この半年間の講義のねらいだったり、意図だったりを理解できたように思う。…

・この授業を通して「教育」というものに自分の知らない視点、より深い視点を知ることができた。テキストの「おわりに」がとても印象に残るものであった。自分たちはこれから教育者になることを目指しているものとして、実践していくのは私たち自身であるということに改めて感じた。実践の中では良い点も悪い点もあると思うけれども、それもまた自分の学びであるとして、子ども達の関わり合いの中で共に育っていくことが大切ではないかと思った。そういうことが喜びや楽しさにつながると思う。思っている以上に簡単ではないかもしれないが、「教育」とは何か考えながら、ゆっくりと進んでいきたい。

・教育という営みを問い続けることが重要なのだと、地域教育学入門の授業を通して分かった。4年間、教育という営みを何度も問い直していきたい。／レポートのアウトラインの再編成に少し悩んでいるが、変更しなくてもできそうなので、このまま進めてこうと思う。参考文献の示し方なども詳しく分かったので、ちゃんと引用元を明らかにして、分かりやすく、論理的なレポートに仕上げたい。

・いったいどうしたらいいのか分からず、とりあえず読んでみるという感じだったけど、[資料を読む時は「情報カード」として]引用・要約・自分の意見を書き出せばいいと分かった。レポートってただダラダラと書くだけではだめなんだと改めて思った。また、ひとつの考えを聞くとそっちの方に自分の考えも傾いてしまうが、ある一面だけでものを言わないようにすることが大事だと思った。

15. 第15回（渡部+α）地域教育ゼミへのお誘い／最終レポートの提出

○地域教育ゼミの紹介

2～4年生で受講する「地域教育ゼミ」のガイダンスを行った。資料を用いて、地域教育ゼミのカリキュラム上の位置づけと概要を説明し、ついで各ゼミから代表スタッフが参加して持ち時間約5分でゼミ紹介を行った。質疑応答の後に、2年生で履修するゼミⅠ（前期）・Ⅱ（後期）の希望アンケートをとった。

○「個人カード」の返却

14回分の「個人カード」を返却した。14枚の「個人カード」から、学習の進歩を自ら確認することができるだろう。また、「個人カード」を卒業まで保管していることで、学びの導入となった「地域教育学入門」を常に振り返ることもできる。

○最終レポートの提出

残りは最終レポートを仕上げる時間とした。提出されたレポートのテーマを以下に幾つか掲げる。

「児童虐待とその原因／児童虐待について／しつけを見直す—混同化する虐待—／学校選択制と住民の学校参加／コミュニティ・スクールの多様性／子どもたちのために今できること／学校と地域と家庭—モンスターペアレントからみた現状—／新たな親の出現／家族援助／不登校について考える／教育の再考—フリースクールに着目して—／少年の心の闇は／少年犯罪から社会をみる／障害児も地域の学校で学べるように／学校週5日制の今までとこれから／ゆとり教育／給食の今昔／音楽は子どもに必要か？／環境が私たちに与える影響／公園について調べよう—公園は必要か？—／生きる場としてのまちづくり」

終章 成果と課題

1. 成果

○「地域教育学」への入門的性格

既存の（学校）教育学をベースにしながら、その到達点を押さえた上で、さらに地域教育学へと再構成し直すことが在学中の4年間の学びの課題である。従って、1年生では既存の（学校）教育学をまずは押さえることができれば「入門」としての役割は果たせたということになる。

その際、鳥取大学では教職必修「人間と教育」・共通教育科目「教育学」を設けており、そちらで教育学の修得が目指されている。そこで、「地域教育学入門」では既存の（学校）教育学を拡張・転換する視点を得ることに重点を置いた。

テキスト選定の理由で述べたように、使用したテキストがまずは視点を広げ、まなごしを転換する上での大きなツールとなった。また、テキストを素材にしつつ、さらにスタッフ各自が専門分野から受講生の固定観念・既成概念を揺さぶろうと熱く迫ったリレー方式の講義がインパクトを与えた。また、フレネ教育や国語の授業のビデオ視聴、特別講師の実践的な話、班での意見交換なども、視野の拡大や視点の転換に役立った。

加えて、第2回（渡部）・第3回（山根）・第5回（渡部）・第13～14回（渡部）においては、「地域学」や「地域教育学」の構想を説明して、崩したものを再構築していく手がかりと方向性を提示した。

○関連カリキュラムのオリエンテーション的性格

第3回（山根）及び第5回（渡部）では、地域教育学科のカリキュラム図を見せながら、関連カリキュラムの構造と位置づけについて紹介した。

また、担当講師のうち、田丸「生涯発達論」（2年前期必修）、太田「地域教育計画論」（2年後期必修）、渡部「地域教育福祉論」（3年後期必修）、山根・一盛「地域教育史」（4年前期選択）が関連科目を担当しており、部分的ではあるが関連カリキュラムへの導きとなった。

なお、最終の第15回において、2～4年生にわたる「地域教育ゼミ＋卒業研究」の事前説明を行い、特に2年生でのゼミⅠ・Ⅱの具体的な紹介を行って、次年度のゼミ選択に向けた情報を

提供ができた。

○知的な学びへのガイダンス的性格

全国的に見て、大学での学びに興味を持たず、学生の学習意欲が極端に低下しているという⁵。大学で取得する単位に関して、「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」（大学設置基準21条）という法基準であることをまず説明した。例えば講義2単位について言えば、「講義2単位90時間の学修＝（1コマ2単位時間の講義による対面学修＋1コマにつき4時間の自主学修）×15回」が基本であることを教えた。すなわち、講義とは別に毎週4時間の自主学修を15週にわたって積み上げることが求められているのである。

具体的には、テキストの予習復習を中心に自宅学習を常に行うこと、その成果を「個人カード」に記入して毎回提出すること、「個人カード」を活用してスタッフとの遣り取りも進むことなどを、第1回目に伝えた。講義はあくまでも関心を広げるきっかけづくり、テキストをもとに自宅学習する契機である。受講生は、懸命に予習復習に取り組んだ。

また、知的生産の方法として図書館の活用法・レポートの作成法を教えた。最終レポートを書き上げることによって、実際のな力になったとともに、書き上げた達成感を味わうこともできた。

このように、知的な学びへの案内役も果たしたといえよう。

○受講生の変容

受講生の視野の広がりや視点の転換の様子は、各回の「受講生の感想」からも確実に読み取れた。

象徴的には、第14回目の感想において、テキストの「おわりに」における著者たちからの読者への呼びかけに共感し、探究を続けて行きたいとの感想が多くみられた。また、同じく第14回目において、テキストの索引に掲げる事項について受講の前後でどのように理解が深まったか自己診断するよう求めたのに対して、「索引の名前をみて、知っている人が増えていたことに驚いた」といった感想もあった。思考や探求を深める上での基礎知識も、テキストの予習復習の中で着実に増えていることが推測された。

2. 課題

○テーマを共有したチーム担当・リレー方式のさらなる深化

チーフの渡部は全体が見わたせるので流れも良く把握できたが、個々の担当者に事前に流れを周知するには課題が残った。この2007年度のまとめ報告が、次年度においては事前に流れを意識する上で役立つと期待される。

ところで、各PARTの総合討論部分を渡部が個人で担当してきたが、そうではなく、各PARTの担当者全員に参加してもらい総合討論を行うという工夫もあろう。また、第6章「学びを支える教育実践」は渡部が担当するのではなく、やはり教科教育学が専門の学習科学分野のスタッフに新たに加わってもらふべきであろう。

なお、テキストの使用に関して、チーフの渡部は「流れをつくる」「予習復習」という面でテキストを大きく位置づけていたが、担当者の中にはその扱いにアンバランスが見られた。受講生からは、「教科書を使用した先生はほとんどおられませんでした。中でも〇〇先生は、教科書を指定することをすごく否定されていて、実際私も授業で使わないのなら、参考書として紹介

⁵ NHKニュース 2008年2月3日報道「大学生6割 授業に興味わかず」
(<http://www3.nhk.or.jp/news/2008/02/04/d20080203000105.html>)

してもらった方が良いと思います。」との感想も寄せられた。

次年度に向けて、チーム内で意思疎通を図りたい。

○関連カリキュラムの有機的連携づくり

学年進行によって2007年度に地域学部が一応の完成をみたので、地域教育学科においてもカリキュラムの順次性・系統性を見直す時期にある。渡部(2007)や今回の報告を一つの契機に、関連カリキュラムの授業実践の交流ができればと思う。例えば、「学習社会論」「生涯発達論」「家族支援論」は科目名に「地域教育」の冠がなく、また単独の担当者と進められているが、既存の学や担当者の関心領域からのアプローチ(例えば、社会教育学、心理学、保育学など)に留まるのではなく、「地域教育学」を構成するカリキュラムとして意識的な再構築がなされなければならないだろう。

特に、「地域教育学入門」と2年後期必修「地域教育計画論」(担当は高口・大谷・太田らのチーム)との連携をまず深めたい。「地域教育計画論」は、地域教育計画が地域のニーズや社会資源などの実態把握の上になされるということに鑑みて、2007年度からは鳥取大学が位置する湖山エリアに出かけて地域調査を行う手法を導入している。これは鳥取大学が理念とする「知と実践の融合」という視点からも極めて有意義である。

2007年度は、地域に存在する様々な社会資源を「教育機能+福祉機能」で捉える接近法を採った。学齢期に留めず、生まれてから亡くなるまでの一生にわたる様々な社会資源を調査させた意義は大きい(山根による「地域教育学」の構想の①機能の広がり、②ライフステージの繋がり)。

これにさらに渡部による構想の③④を加味して、「③空間・地域の重層性+④主体・アクターの関係性」を実感させることも可能であろう。湖山エリアには当然ながら、一生にわたって、様々な人間形成機能がある。それらは、例えば町内会館(町内)、地区公民館(地区)、小学校(4小学校の校区)、中学校(1中学校の校区)、高校(東部圏域)などというように関わる地域を異にしながらか重層的に存在している(③)。また、同じ幼稚園・保育所・教育機関・福祉施設でも、民間・NPO法人・社会福祉法人・学校法人・事業団・社会福祉協議会・第3セクター・自治体など、設置主体や運営・経営主体が異なると関係する主体・アクターもまた違ってくる(④)。こうした接近法により、「地域教育学」の構想枠組みから地域を見させたり、「地域学」の構想枠組みで示されている「地域生活の4領域(自助、協同、市場、公共)」を掴ませることもできよう。

なお、「地域教育計画論」と並行して「地域教育政策論」(2年後期選択)が開講されている。立案された教育計画が、多様な主体・アクターの複雑な関係性の下に政策として実施・実現される(または抵抗を受けて頓挫する、修正される等)姿を見せることはできないだろうか。

関連カリキュラムの有機的連携づくりという面では、「地域教育学入門」の担当者を越えて、学科全体のスタッフで意思疎通を図りたい。

○「地域教育学」のさらなる発展へ

山根及び渡部が示した「地域教育学」の構想はまだ初歩段階にある。リレー方式による「地域教育学入門」の成果を踏まえるならば、第12回(第9章)において太田が紹介した「トライアングル型成長構造」をどのように構想のなかに組み込むかが問われよう。従来の振り子型の「学校-家庭-地域」の大きくは二極構造に、新たに「消費文化」という世界をどう位置づけるかである。

また、同じく第12回で太田が、また第9回(第7章)で一盛が言及した「労働」を人間形成

機能にどう組み込むかである。「ムラ社会での生活や労働が人間を形成する」と例示しながら、「産・育・訓・教」の機能図や「誕生から往生まで」のライフステージ図では、「労働」の位置づけがまだ十分ではない。「生涯発達論」において、子どもから大人への発達や移行に重ねて、学校から社会（労働）へのトランジションやキャリア発達も論ずるのか、別途新たに「トランジション保障」や「キャリア論」「労働論」を起こすかである。

さらには、第11回の特別講義で扱った福祉の視点・視座をどう位置づけるかである。「地域教育+地域福祉=地域教育福祉」という講義中に行った加算方式での入門的な説明も可能であるが、単に「福祉」をサービス区分や領域的に捉えるのではなく、「福祉=well-being=幸せ」と理解するならば、教育は「福祉=幸せの追求・実現」の中に含まれる、福祉をベースとしてその上に置かれる、さらには福祉に向けて営まれる、福祉は教育により実現される等とも理解しうる。

このように、授業実践を総括する中で、「地域教育学」の研究面でのさらなる発展に繋ぐことが重要だ。この点においても、科学研究費に基づく本共同研究をはじめ、日常的に学科全体で取り組む必要があるだろう。

(以上、文責・渡部昭男)